

コタンの赤ひげ先生

高橋房次

「院長さんが死んじやった。
院長さんが…。」

悲鳴に近い子どももの叫び声
が響き渡りました。

一九六〇年六月二十九日、
白老町の全町民は、心から高



〔仙台藩白老元陣屋資料館蔵〕

橋房次医師の死を悼みました。ひざまづいて空を見上げて
号泣している人や立ったまま空を仰いで泣き叫ぶ人など、
周囲にはわかることなく嘆き悲しむ姿が見られました。

房次の葬儀は、参列者が千人を超えて、その列は、四百
メートルにもなったそうです。

房次は一八八二年、栃木県で九人兄弟の五男として生ま
れました。生家は代々農業を営み、父は働くこと以外に楽
しみを知らないという、素朴で誠実な人柄でした。母は村
でただ一人の産婆でした。お産があると聞いては、すぐに
駆け付けて快く赤ん坊を取り上げ、そのうえ自分の衣服を
ほどいておむつを作ってあげるほどの、情の深い優しい女

性でした。母は房次が幼い頃から、いつもこのように話し
て聞かせました。

「房次、お前は大きくなったら、お金を儲ける人よりも、
世のため人のためになるような人間になりなさいね。それ
は人として一番大切なことですよ。」

この母の言葉から、房次少年はいっしょか医者になること
を志すようになりました。そして、猛勉強の末、一九〇三
年に東京慈恵医学専門学校を卒業して、念願の医師免許を
取得しました。

青森県の町立田名部病院の院長を務めていた頃、北海道
ではアイヌの人たちが医療に恵まれず、悲惨な生活をして
いるという噂を何度も耳にし、房次は「北海道に行かね
ば。」という強い決意をもちました。

一九一五年から五年間、房次は、日高の新冠の地で村医
として勤めた後、石狩地方の輪厚で医院を構えました。そ
して、二年ほど経った後、白老のアイヌコタンに公立病院
を開設する計画を知らされ、胆振支庁長の推薦で、病院長
になってほしいと依頼を受けました。

病院といっても入院室は畳二十四畳分の大部屋一つ。
診療室には簡単な医療器具と粗末なイスがあるだけでし

た。一メートルの廊下^{ろうか}を隔てて房次の住宅が続いていました。家具などは何一つありませんでした。しかし、房次はこの簡素な部屋で、希望を胸に、決意を新たにしました。

「ここが今日から私の城だ。さあ、頑張るぞ。病に苦しむ人々を助けるのが、私に与えられた使命なんだ。」

一九二二年、病院長となった房次がまず行ったことは、アイヌの人たちの家庭の分布状況と、その家族構成の調査でした。全ての家庭を訪問して健康状態を調べ、病名を分類し、一つの統計表にまとめあげました。

その結果、多くのことが分かりました。当時、最も多い病気は肺結核などの伝染病でした。伝染病は、^{*}和人の渡来によってもち込まれたもので、この病気にむしばまれることは、アイヌの人たちにとっては悲劇としかいようがありませんでした。房次は憤り^{おこり}を感じずにはいられませんでした。

アイヌの人たちは、これまで医者にかかることはなく、草木の根や皮などを煮出して飲んだり、傷の手当てなどは塩水で洗ったりしていました。房次は病院にかかるといふ習慣がないアイヌの人たちに対して、一人一人と腹を割って話し、医療を受けることの大切さを伝えることを心がけ

ました。アイヌの人たちは、そんな房次に次第に心を開き、一人また一人と病院を訪れるようになりました。そうなるのと、房次は顔を見ただけでカルテを作ることができました。彼の頭の中には、以前調べたアイヌの人たちの一人一人の名前や家族構成、病気の情報などが、正確に記憶されていたからです。

ようやく病院を訪れてくれるようになったアイヌの人たちから、房次は診察料を取りませんでした。また、午前中に病院での診察で病状がやや重いと判断した患者^{かんじや}の家に、午後から往診し、さらに夜中になってからも再び往診するということが日常でした。

数キロも離れた家から診察の依頼が来た時は、迎えるの人を自宅に休ませて、自分は吹雪の中、馬を走らせ、長いひげをカチコチに凍らせながらも決して嫌な顔ひとつせず往診しました。その誠実さは、アイヌの人たちのもとより、町中の人々の心にしみ込んでいきました。



〔親身になって診察をする房次〕

〔仙台藩白老元陣屋資料館蔵〕

「先生は人の病気を治すのが商売だが、あまり無理をしな
いでください。特に夜中の往診は：。」

「ありがとうございます。でも病氣の人たちが往診を求める時の気持
ちや、迎えに来る人のすがるような気持ちを考えると、行
かないではいられません。それにもし一度断ったとしても
また迎えにくるかもしれない。それならばはじめから快く往
診した方が、精神的にも早く回復する。病人は、肉体だけ
が病んでいるわけではありません。安心するということが大
きな薬になるんですよ。」

房次は、決まってこう答えるのでした。

それまで、他の病院では、アイヌの人たちは土間*のよう
なところで待たされ、和人は畳部屋に通されることがあり
ました。さらに、アイヌの人たちは朝から病院に行っても、
夕方まで待たされることがよくありました。そんな中、房
次が患者を診る際は、和人とアイヌの人たちを分け隔てる
ようなことは一切ありませんでした。そんな房次の評判を
聞きつけて、ほかの町からも房次のもとに患者がやって
きました。

一九三二年、白老郊外に十数戸の開墾者かいこんが入植した際、
房次は北海道庁から委託いたたくされ、彼らの専門医を務めること

になりました。週に二回、熊が出没する山道を通り診察所
に出向くのですが、相変わらず往診料はもちろん、薬代さ
え受け取ろうとはしませんでした。ありがたいと思いつつ
も入植者の一人が思い切ったはずねました。

「なぜお金を取らないのですか。」

「私は道庁から手当てをもらっているからです。」

そうはいうものの房次自身の暮らしは決して裕福なもの
ではありませんでしたし、医療品や薬品が豊富にそろって
いるということでもありませんでした。しかし、入植者た
ちの暮らしを知っている房次は、とても治療代を請求
することはできなかつたのです。また診療の際に、衣服や
米、子どものいる家には菓子を持っていくことも常で、帰
りがけにさりげなく置いてくるのでした。

一九五五年、白老町名誉町民条例が制定された日、町議
会は満場一致で、その第一号に房次を推しました。しかし
房次は、すぐに辞退しました。町長をはじめ、町民たちは、
恩返しをしたいという気持ちで、何度も説得しました。

その熱い気持ちを受け取った房次は、その話を受け、名
誉町民第一号に認められました。

その二年後、これまでの房次の地域医療の功績をたたえ

て、北海道医師会賞が贈られました。信念をもって人生を捧げてきた地域医療の仕事が、なにより同業の医師仲間から認められたことは、房次にとって大変誇らしいことでした。

「明日からまた、白老町で聴診器を持ちます。」

授賞式の挨拶をこう締めくくった房次の言葉は、彼の人の柄をよく伝えるものでした。



〔名誉町民第1号の記念に贈られた胸像〕
〔仙台藩白老元陣屋資料館蔵〕

一八八二	栃木県下都賀郡乙女村（現小山市）で生まれる
一九〇三	医師開業試験に合格する（二五歳）
一九一五	家族で新冠村（現在の新冠町）に村医として移住する（三十三歳）
一九二〇	広島村輪厚（現在の北広島市）に転居し、医院を開業する（三十八歳）
一九二二	北海道庁立白老病院に院長として赴任する（四十歳）
一九五五	名誉町民第一号に認められる（七十三歳）
一九五七	北海道医師会賞を受賞する（七十五歳）
一九六〇	白老町で死去する（七十八歳）

*和人：アイヌの人たちとそうでない日本人と区別させるために用いた言葉

*土間：家の中にあつて、床を張らないで、地面のままになった所